

ちよっぴり成長したぼく

五年生の「わたしの名前はポンソニー」というお話を使った道徳の時に、ぼくは初めてぼくのお父さんがガーナ人でお母さんが日本人、そしていじめられていやだったことをみんなに話しました。でも、みんなに言うか言わないか、とてもなやみましました。なぜ話したかというところ、ここで話さないと、もうだれにも自分の気持ちを伝えられなくなるんじゃないのかと思ったからです。

授業の中で、ほかのダブルの友だちが自分の事を次々と話し始めました。

「あっ、みんなに話してる。ぼくも今まで自分のことをみんなに言う機会がなかったから、ここで言わなくちゃ。」

と思いました。でも、友だちに自分のことをどう思われるか考えると、言うのはしんどかったです。今までいじめてなかった人までぼくがいじめられていたことを知って、

「あいつ、前からいじめられていたからいじめていいんや。」

と思われるんじゃないかと考えました。不安が大きかったけど、少しでもぼくに興味を持ってぼくの事を知ってもらいたいと思ってみんなに話しました。

ぼくは、お父さんから受けついだはだの色や、かみの毛、顔立ちは、自分のものとして当たり前だと思っています。それでも、かみの毛もみんなとちがってくせがあるので、人の目が気になってついフードをかぶっていたこともありました。自分が目立ってじっと見られるのはいやでした。

ぼくは、人とすれちがうのが少しこわい時があります。なぜかというところ、すれちがった時に笑われたり、ふり返られたりすると何とも言えない気持ちになるからです。だから、前から中学生とかが来た時、道を曲がってでも遠回りして帰ったことがあります。人から見られる時に、

「あの子どんな子なのかな？」

という関心を持った目ではなく、

「あっ、あれ外国人や。」

という、ものを見ているような目で見られている気がするのです。



ある時、クラスで泣いている友だちがいました。それを見た時、ぼくと同じようにいじめられてつらいのかなと思って声をかけたことがありました。そのことがあって、おたがいによくないことがあった時に話をするようになりました。ぼくも、前は何でも暗い方に考えていたのが、そのころからは明るく考えられるようになりしました。その友だちは、ぼくがまちがっていたら、「ちがっていると思う。」

と言ってくれます。そして、なやみごとを相談した時、いっしょに考えてくれたり、助けてくれたりする関係になってきました。

その友だちは、自分に対して正直だと思います。ぼくもそうなりたいと思ってきました。そして、少しずつ言いたいことを言える自分になってきたと思う時があります。そうやってきて、いろいろな事を自分で考え、自分から行動できるようにになったかなと思います。



今ぼくは、「外国人」と言われていじめられたとしても、悲しい気持ちはあるけど以前ほど落ちこんだり、泣いたりすることはないでしょう。それは、友だちに相談できるようになったからじゃないかと思います。みんなに自分のことを話してから、いじめが減りました。クラスの子が、ぼくのことを分かってくれたのかなと思いました。以前だったら「遊びに入れて。」と言ったら断られるような気がして、みんなが遊んでいても何も言えなかったけど、今は、「入れて。」と言っても断られるとは思わなくなりました、みんなも受け入れてくれます。

ぼくは、みんなとちがうことによって、日本人の人には分からないダブルの子やいじめられている子の気持ち分かるし、他の国の文化も分かるし、いろんな体験ができるので、ダブルに生まれてよかったなと思えるようになりました。

※ダブル：「二つの文化を持っている人」という意味のことばです。